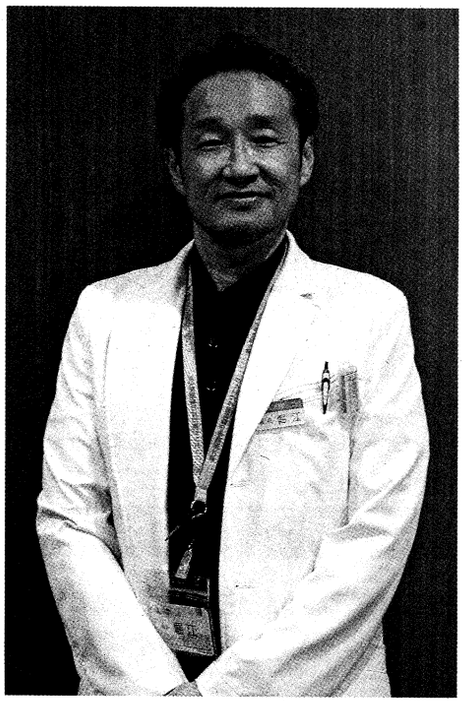
Spot 第142回

今回の会員SPOTは、東淀川区で「新大阪画像の森診断クリニック」を開業する堀江仁志（ほりえ・ひとし）先生を訪ねました。堀江先生は画像診断専門のクリニックとして、患者さん一人ひとりに合わせた検査に取り組まれておられます。今回は、先生のこれまでの取り組みなどについてお聞きしました。

画像診断で導く治療の最適解

目指すのは地域に根ざす画像診断センター



東淀川区

堀江 仁志 先生

―先生が放射線科医になったきっかけなどについて教えてください。

実は、医学部に進むまではミュージシャンを目指しており、本格的に医学部を目指すようになったのは20歳を過ぎてからでした。

年齢的に周囲より遅いスタートになったため、少しでも早く第一線で活躍したいと考えていました。

そんな時に、放射線科の先生が、臨床実習で様々な科のカンファレンスに参加していることに気がつきました。当時はCTやMRIが出始めたばかりだったのですが、私と年齢もあまり変わらないその先生が、ベテランの教授陣に解説する姿を見て「これからは画像診断の時代が来る」と感じ、放射線科に進みました。

―医師としての経験を生かし、起業もされていると聞きました。

医師になってからは、大学病院で勤務医として論文作成や、複数の病院で画像診断をしていました。当時は、医療分野でちょうどIT化が始まった時代で、出先の病院で「遠隔読影」の研究が進められていました。

私は医師になる前にコンピュータで楽曲などを作っており、当時にしてはPCを扱うことに慣れていました。私がPCに詳しいという噂が病院の役員などに伝わったことをきっかけに、遠隔読影に関わることになりました。

その後、アルバイトとして画像診断に行っていた病院で、遠隔読影を導入してみたところ喜んでいただきました。こうした経験を踏まえ、一旦臨床を退き遠隔読影の会社として事業化することにしました。

―その後は、どのようにして開業につながったのでしょうか。

最終的に20年近くは、東京と関西を往復しながら遠隔読影の事業に携わっていたのですが、医療とビジネスを両立させることへのストレスや、そもそも患者さんの顔が見えないことでの大変さも感じていました。

そういった思いもあって「医師として臨床で終わりたい」と考えるようになり、撮影から読影まで携わることのできるクリニックの開業を決意しました。

―診療で心がけていることを教えてください。

当院では患者さんのために「最高の医療」を施したいと考え、画像の撮影方法からレポートまで一人ひとりの患者さんに合わせてデザインすることを心がけています。

当院の患者さんは近隣の他院からの紹介で受診される方が多いのですが、来院された際には当院でも一から診察し、最適な方法で撮影を行います。

また、「言葉は心」と考え、パターンに拘らず丁寧に画像診断レポートを作成し、治療にあたる医療機関にお返ししています。

―2024年は診療報酬改定の年でもありますが、改善してほしい点数などはありますか。

画像診断では、2部位として撮影しても1部位のみの算定とされることもあり、不合理に感じる要件が多くあります。

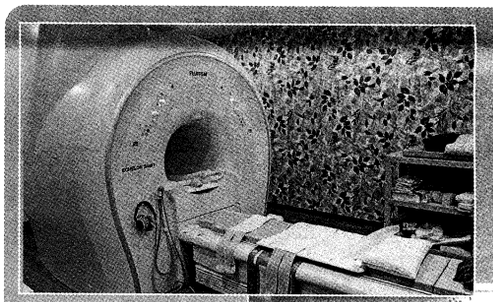
それぞれの患者さんに応じて必要な検査を行うには、それなりに時間と労力がかかります。適切な検査を行うために算定の不合理を改善してほしいです。

―最後に休日の過ごし方なども教えてください。

学生時代からのバンドを相変わらず続けています。今は全員医師として働いており、それぞれに多忙ではありますが、出来るだけ集まって練習やライブを行っています。

また、写真も趣味で神戸新聞社の写真コンクールで賞をいただいたこともあります。

―ありがとうございました。



◀プロジェクションマッピングを楽しみながらの検査が可能なMRI

▶待合室の水槽。院内は全体的に森の中のように、ゆったりとリラックスできる空間